

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04552

研究課題名（和文）フランス学校衛生論史研究

研究課題名（英文）A Historical Research on School Hygiene in France

研究代表者

河合 務（KAWAI, Tsutomu）

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：10372674

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで研究蓄積が手薄であった19世紀末から20世紀初頭のフランス学校衛生著作群を系統的に分析し、その内実と特徴を詳細に明らかにした。特に（1）学校施設や学校生活が子どもに及ぼすリスクの内容、（2）それに対する学校衛生上の対応策、（3）学校衛生に携わる三者（学校医・教師・親）の役割と関係を分析した。リスクの内容が近視、脊椎側弯症、感染症、疲労、性病など多岐にわたっていたこと、対応策として知能検査、身体測定、衛生教育、コロニー・ド・ヴァカンスが注目を集めたこと、そして、学校医のリーダーシップが確立されていったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学校衛生論の源流のひとつであるフランスの学校衛生論史における「衛生」概念の特質と影響力を、特に（1）「不衛生」な環境の排除、（2）子どもの「身体管理」技法、（3）「清潔」観の内面規範化、（4）子どもの「生命」保護を目指した学校外の諸実践、との関連性に着目しつつ解明した。フランスの公教育が本格的に確立される特に1880年代以降の学校衛生論の展開に関する先行研究は手薄であったが、本研究はその具体的内容に迫っている。また、ポスト・コロナ時代の学校のあり方を考えるための基礎的知見としても本研究の成果は学術的意義や社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The research has systematically analyzed French school hygiene books from Late 19th century to early 20th century. The main result of this study is to have clarified the characteristics of French school hygiene at this period. I investigated details of the risks that school facilities and school life would pose to children. Those risks were, for example, myopia, scoliosis, infections, fatigue, venereal diseases, etc. School hygienists insisted on intelligence tests, physical measurements, hygiene education, etc. as urging changes to the traditional way of school. And then, school doctor leadership established.

研究分野：教育学

キーワード：学校衛生 学校病 姿勢 疲労 知能検査 身体検査 衛生教育 コロニー・ド・ヴァカンス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの「衛生」概念は「健康の状態」を形容するギリシア語「ヒュギエノス(hygienos)」に由来するが、19世紀以降に普及した「衛生」は健康状態を維持することに役立つ装置と知識を集大成する言葉として用いられるようになっていく(G. Vigarello, *Le Propre et le Sale*, 1985〔邦訳1994〕)。こうした「衛生」概念の歴史的変容は、近代社会の人間観、家族観、子ども観、身体観、等に影響を与え、さらには学校衛生を通して教育のあり方にも波及するようになったと推測されるが、その点を具体的に明らかにするべく行われた先行研究の蓄積は、あまり多いとはいえない。伝統的な事件史中心の歴史研究からの転換を志向したフランスの「アナル派」歴史学が展開される過程で主題化された身体の歴史研究をリードしてきた G. Vigarello の影響下で遂行された S. Parayre の *L'Hygiène à l'École* (2011) は 17 世紀末から 19 世紀後半までのフランスの学校衛生論の展開を俎上に載せた貴重な研究である。この研究では、当該時期に「不衛生」な環境への医学的なまなざしが強化され、それと相まって、学校における集団感染の予防、体罰の有害性、子ども・若者の性的実践のコントロール等が議論されたことを史料分析にもとづいて具体的に指摘している点は本研究課題にとって重要な研究成果である。とはいえ、Parayre の研究が 1860 年代以前の分析に終始していることは確かであり、フランスの公教育が本格的に確立される特に 1880 年代以降の学校衛生論の展開を対象とする研究が待たれる。その意味では、2011～2014 年度に科学研究費助成事業(基盤研究(C)、課題番号 23530994、研究代表者:寺崎弘昭)として遂行された「ヨーロッパ学校衛生論史研究」の研究成果が参考となる。

この科学研究では、20 世紀初頭にドイツ、イギリス、フランス、アメリカで開催された「学校衛生国際会議」での議論の全体像の分析が試みられ、この国際会議に参加した各国の学校衛生関係者の言説と本国での活動がフォローされ検討されている。筆者も、この「ヨーロッパ学校衛生論史研究」に連携研究者として参加し、2012 年度にフランス、2013 年度にイギリスで学校衛生論の現地史料所蔵調査を行ったほか、研究成果報告書(2015 年 3 月)の第 3 章(61-80 頁)に拙稿「学校教育の衛生化と賞罰論」を執筆している。ただし、この拙稿では「学校衛生国際会議」に参加したイギリスの衛生行政官 A. ニューズホームのイギリス、アメリカでの活動と思想を対象を限定して分析するにとどまっておらず、2012 年度にフランスで現地所蔵調査した史料の分析も含めて 19 世紀末以降のフランスの学校衛生論に関する本格的な考察を遂行することができていない。一方で筆者は 2015 年度の科学研究費助成事業(研究成果公開促進費、課題番号 15HP5196)として『フランスの出産奨励運動と教育』(2015)を出版し、フランスの出産奨励運動に組み込まれた人口動態論(デモグラフィー)が人口言説を構成し流布されていく模様を分析した研究成果を発表し、人口(population)への配慮と「衛生」との関係性に注目するに至った。このように、これまでの研究成果を基盤とし発展させることを意図してフランスの学校衛生論の歴史的展開を分析する本研究課題を着想した。

2. 研究の目的

明治以降に西洋から移入され学校教育の「衛生化」を促進した「学校衛生」論は、19～20 世紀初頭のヨーロッパで陸続と開催された「世界衛生会議」「学校衛生国際会議」等を踏まえ定着した「衛生(hygiène)」という歴史的概念を軸に構成され、近代社会における人間・家族・子ども

も・身体へのまなざしを規定している。

本研究では、学校衛生論の源流のひとつであるフランスの学校衛生論史における「衛生」概念の特質と影響力を、特に(1)「不衛生」な環境の排除、(2)子どもの「身体管理」技法、(3)「清潔」観の内面規範化、(4)子どもの「生命」保護を目指した学校外の諸実践、との関連性に着目しつつ解明する。

3．研究の方法

本研究課題の研究手法としては、19世紀末以降のフランス学校衛生論著作を中心的な分析対象とし、その内容を主に(1)「不衛生」な環境の排除、(2)子どもの「身体管理」技法の開発、(3)「清潔」観の内面規範化、という視点から解明する。こうした視点は、先行する学校衛生論史研究の蓄積を土台として設定されるものであり、また、これまで研究的に手薄であった19世紀末以降の状況として、フランスの細菌学者パストゥール(1822-1895)が病気の原因としての細菌の世界の解明に先鞭をつけた「パストゥール革命」とも呼ばれる「清潔」観の転換に関する考察が不可欠であり、この点を含めて学校衛生論の特質を明らかにすることを目指すものである。

さらに、(4)子どもの「生命」保護を目指した学校外の諸実践と学校衛生との関連性を解明する。具体的には、乳幼児死亡の防止、児童虐待防止、児童酷使への批判を柱とする児童保護運動への「衛生」概念の波及の様相を考察し、学校衛生論との共通性や差異を分析することを通して、当該時期の学校衛生論の特質と影響力を家庭生活や生産労働との関係性を含めて解明することを試みるものである。このため上記～の児童保護運動関連の史料を学校衛生論著作の周辺に位置づけ両者を系統的に分析する。

4．研究成果

(1) 学校リスクの内実

本研究では、学校施設や学校生活が子どもに与えるリスクの内実をフランス学校衛生著作群から抽出する研究作業を行った。その成果として、リスクの内容が近視、脊椎側弯症、疲労、感染症、性病など多岐にわたっていたことが明らかとなった。これらのうち近視や脊椎側弯症は学習時の姿勢の悪さ(書物や机との距離の近さ、背筋が曲がっていること)と関係が深いと考えられた。また、疲労は長時間の学習、長時間座っていること、運動不足に要因が求められた。

この時期に想定されていた感染症の具体的なものとしては、はしか、風疹、猩紅熱、天然痘、ジフテリア、百日咳、おたふく風邪、腸チフス、インフルエンザ、コレラ、結核であった。これらについては19世紀後半の細菌学の発展によって接触感染、飛沫感染の危険性が指摘された。

さらに、性病については若者の性的な乱れが問題視されたほか、教員による体罰も子どもへのリスクとして論点となり、学校衛生の観点から批判が強まっていたことも明らかとなった。

(2) リスクへの対応策として学校衛生

続いて、上記のような学校リスクに対してどのような対応策が提示されたのかについて検討した。まず、疲労問題に関して学校教育のカリキュラムを軽減し、休息を増やす方向が模索されたことが注目される。さらには体操の重要性が指摘された。これらは知育に偏った従来型のフランスの学校教育に一定の修正を目指す提案であった。

また、学校の医療検査体制を確立して、子どもの医療的検査を行き渡らせる方針が打ち出され

た。学校衛生論者は、身長、体重、肺活量、視野計測、腹囲、胸囲、筋力、さらには骨格、胸部、肺、心臓、消化器官、発声、視力、聴覚など、子どもの身体の各部位を検査することで「子どもの成長」を具体的に捉えることが可能となるという見解をとったことは、この時期が心理学、生理学、小児医学等と結びつきながら展開されることとなる発達研究の基盤となる体制の確立期であったことを示すものといえる。

(3) 学校医のリーダーシップの確立

こうした学校衛生論の展開の中で、中心的な役割を期待されたのが学校医であった。学校医は、その専門的な医学知識を生かして子どもや教師を対象とする衛生教育を担うだけでなく、体操教師のアドバイザーとなることも期待された。また、子どもの医療的検査を行い、その結果を記録し、子どもひとりひとりの「健康カード」を作成することが業務内容とされた。

ただし、学校医が病気を発見した場合でも、家庭の責任のもと病院で治療を行うのが原則であるとされた。学校医の主な役割は、学齢期の子ども集団における病気の発見と「正常な成長」から逸脱している子どもを発見する「スクリーニング」であった。

また、病気がちな子どもを選んでコロニー・ド・ヴァカンス（林間学校）に送ることも学校医の役割だとされた。コロニー・ド・ヴァカンスは夏期に数週間程度、自然の多い地方で実施され、栄養豊富や食物をとり、適度な運動をし、清潔で健康によい生活習慣を確立することを目指す児童保護的な施策であり、19世紀末から20世紀初頭の学校衛生のひとつの方策に組み込まれていたことも本研究によって明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 河合 務	4. 巻 第18巻第2号
2. 論文標題 生徒指導の源流における軍隊モデルと治療モデルーJ. ボールドウィンの教育思想ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合 務	4. 巻 第17巻第2号
2. 論文標題 フランスの学校衛生とコロニー・ド・ヴァカンスー19～20世紀転換期における教育と転地療養ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合務	4. 巻 16（2）
2. 論文標題 学校衛生論におけるリスク概念と教育ーシャルル・シャボの学習（travail）論の検討ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合務	4. 巻 15-1
2. 論文標題 学校衛生と産育ー乳幼児死亡の回避可能性をめぐる20世紀初頭フランスの動向ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合務	4. 巻 15-3
2. 論文標題 生徒指導の源流と訓育概念の形成――明治前期の翻訳学校管理法書とdiscipline――	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合 務	4. 巻 第14巻第2号
2. 論文標題 学校衛生と子ども観――20世紀初頭フランスにおける子どもの疲労問題と「知的衛生」――	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 167 177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------